

京都大学	博士(文学)	氏名	Ernani Shoiti Oda
論文題目	Identity, Ethnicity and Narrative : A Sociological Framework for the Experiences of Japanese Brazilians Living between Japan, Brazil and Beyond (アイデンティティ・エスニシティ・物語 —在日日系ブラジル人の経験をめぐる社会学的枠組み)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は、アイデンティティ概念の諸側面を関連付けるための理論的な枠組みを提起し、在日日系ブラジル人の事例に関してブラジルと日本で行った質的調査によってその枠組みの有効性を明らかにすることを目的とするものである。</p> <p>序章では、アイデンティティ論の展開と現状について説明を行った。従来のアイデンティティ論では、アイデンティティの固定した特徴のみを強調する「恒久的」側面と、アイデンティティの価値を評価せずに、ただ単にアイデンティティの特徴を指摘する「記述的」側面という二つの側面が特に注目されていたが、それ以外の側面も次第にアイデンティティ論者によって考察されるようになり、アイデンティティの変化を論じる「流動的」側面と、アイデンティティについて価値的な評価を行う「規範的」側面が新しく取り上げられてきたことを示し、これらアイデンティティの諸側面を統合的に論じる枠組みの必要性という本研究の主旨を指摘した。さらに、序章では、本研究で展開した理論的枠組みの有効性を確認するために、在日日系ブラジル人を対象とした実証研究を行ったことを示した。在日日系ブラジル人の先行研究を検討しながら、アイデンティティ論にとってこの事例のもつ意義についての説明も行った。</p> <p>第一章では、アイデンティティの諸側面を関連付けるための理論的な枠組みを展開する試みを行った。エスニシティにおけるいわゆる「認知的アプローチ」と英語圏の政治哲学、特にいわゆる「リベラル・コミュニタリアン論争」を参照しながら、「物語的フレーム」という概念を提起した。この場合、アイデンティティは客観的に与えられたものではなく、主観的に認知された「フレーム」として捉えられるが、ここで述べる「フレーム」は、単なるカテゴリーやラベルではなく、「物語」として捉えるべきであると指摘した。物語的な形をとるフレームによって、それぞれのアイデンティティがどのように形成されたか、現在どのような立場に立っているか、そしてこれからどうやって展開していくか、というストーリーの作成が行われ、過去、現在、未来を通じて、矛盾のない統一されたストーリーを作成することによって、ストーリーが語るアイデンティティはあたかも「恒久的」だという印象が与えられる一方、それぞれのアイデンティティを記述するストーリーは無数にあり得る。この意味では、ストーリーとアイデンティティは「流動的」である。さらに、それぞれのアイデンティティを取り上げる物語的フレームは、さまざまな出来事を「記述」するが、未来の展開に関する語りになると、「良い」展開、あるいは「望ましい」展開が語られることが多く、こうした物語的フレームはアイデンティティの展開を記述するだけではなく、その展開</p>			

の方向性に関して「規範的」評価も行うのである。第二章以降では、上記の枠組みの視点から在日日系ブラジル人の事例を考察した。

第二章では、日本人のブラジル移住が開始された二十世紀初頭から日系ブラジル人の日本でのデカセギ生活が進んでいる今日にかけて日系ブラジル人の歴史を取り上げた先行研究の検討に基づいて、マクロな視点から日系ブラジル人アイデンティティの形成を分析した。先行研究の中で、日本移民及び日系ブラジル人の過去・現在・未来の捉え方が多様であり、ブラジル社会への適応という共通のテーマがいずれの見方でも重視されているものの、具体的な描き方はさまざまな形をとり、ブラジル社会への同化、日本文化への愛着、あるいは日本政府への恨みなどのモチーフを中心とする物語的フレームが見いだされ、それぞれには異なった日系ブラジル人アイデンティティが形成されるという実態を明らかにした。これらの言説や視点に基づいた物語的フレームが知識層のみならず、一般人の意識にも強い影響を与えていることも示した。

第三章では、ポピュラー・カルチャーの表象を中心に、日系ブラジル人アイデンティティの意味と多様性を考察した。そのための題材として、日本人のブラジル移住開始から現在の日系ブラジル人のデカセギ現象にかけての経緯を描くブラジルで作成された映画と日本で作成されたドラマを分析した。これらの作品には、日系ブラジル人の過去・現在・未来を表象しながらアイデンティティの諸側面を関連付けるさまざまな物語的フレームが登場し、ブラジルの映画の場合、ブラジル社会への同化と日本政府への恨みが主なテーマとなるのに対し、日本のドラマの場合、日本文化への愛着が主なテーマとなることを示した上で、これらは第二章で取り上げた物語的フレームの単なる繰り返しではなく、第二章の物語的フレームを新しい形で流用し、変化させるものであることを指摘した。

第四章では、兵庫県神戸市にある日系ブラジル人ボランティア団体とそのメンバーを対象に行った参与観察とインタビュー、それからブラジルで行った補充調査に基づいて、過去の日本人のブラジル移住過程の記憶が現在日本に暮らしている日系ブラジル人のなかでどのような形で再構成され、彼らが抱く将来への期待にどのような影響を与えるのかという問題点を物語的フレームの視点から考察した。過去の移住過程に関しては、日本移民や日系ブラジル人は日本政府に「だまされた」という語りが構築され、現在の日系ブラジル人と日本人との差異化のプロセスが形成され、将来日本がこの道徳的「負債」を整理すべきだという物語的フレームが形成され、在日日系ブラジル人のなかにある種の「被害者」アイデンティティが登場する過程を指摘した。この考え方には、現在、日本における日系ブラジル人の立場を正当化する役割もあり、記憶の形成には政治的な意義があることと、日系ブラジル人の日本での社会背景と彼らが生み出した戦略との相互作用によって展開していることを示した。

第五章では、日本とブラジルで行ったインタビューに基づいて、一つの家族(5名)のファミリーヒストリーに取り組んだ。そうしたなかで、「ブラジル人」としてのアイ

デンティティや「日本人・日系人」としてのアイデンティティを構築する物語的フレームが見られる一方、より複雑なアイデンティティ形成が行われることも判明した。たとえば、この家族が自らの過去・現在・未来に関して語る際、日本への言及のなかには、日本では「外国人」の中にも、「より望ましい外国人」と「あまり望ましくない外国人」が存在しており、日本人は欧米に対してより好意的な態度を見せるため、ランク付けの上位を占める欧米人をふくむ「第一世界」出身の人々と、これに対して、下位を占めるブラジル人を含む「第三世界」の人々との区別があり、その結果、「第三世界」出身者としてのアイデンティティが形成されることを示した。そのほかに、日本は十分に世界、特に欧米の影響を受けていないため、閉じられたメンタリティが残り、外国人にとって日本での生活は苦しく、そのなかでも国際化が進んでおり、西洋文化に開かれているブラジルから来た人は特に苦勞するという語りを中心とする物語的フレームもあり、こうした閉じられた日本文化というイメージに対してある種の「コスモポリタン」アイデンティティが在日日系ブラジル人のなかで形成されることとなるというプロセスも確認した。

第六章では、日系ブラジル人の6名を中心にブラジルと日本で行ったフィールドワークやライフストーリーインタビューの結果に基づいて、前章で紹介したいわゆる「第三世界」アイデンティティと「コスモポリタン」アイデンティティの実践的な意味を考察し、両方のアイデンティティには象徴的な側面のみならず、仕事、学校、家族・友情関係など日常生活のなかでも影響があることを指摘した。さらに、「第三世界」出身者としてのアイデンティティと「コスモポリタン」としてのアイデンティティを中心とする物語的フレームは、さまざまな形で日系ブラジル人と日本社会の対立と協力、または日系ブラジル人同士の摩擦と連帯感を表現することも明らかにした。

結論では、本研究の理論的枠組みと事例研究の意義を整理しながら、残された問題点を示し、これからの課題として問わなければならない論点を提示した。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、日系ブラジル人の生活世界をフィールドにして、社会的アイデンティティの持続と変容・生成について実証的かつ理論的に考察した優れた社会学的論考である。本研究の社会学的意義は以下の3点に要約できる。

第1は、エスニシティ・アイデンティティ研究における新たな理論的視座の提唱であり、第2は、移民研究における「マルチ・サイティッドエスノグラフィ(multi-sited ethnography)」の手法による新たな方法論の確立である。さらに第三の意義としては、在日日系ブラジル人の帰属意識の多元的生成メカニズムを実証的に解明した点があげられる。

エスニック・アイデンティティ研究は、E. エリクソンの社会的アイデンティティ研究の影響を強く受けて、1960年代まではその恒久的、本源的性質を強調し、その基盤を解明する研究が支配的であった。しかしながら1970年代以降、その道具的、構築的側面が脚光をあびるようになり、とりわけ1990年代以降のグローバル化の急速な進展と軌を一にして、流動性、液状性、異種混濁性をその核心とする見方が優勢となり今日に至っている。

本研究においては、こうしたエスニック・アイデンティティ研究を支配してきた二つの視点について、前者を規範的・恒久的潮流、後者を記述的・流動的潮流と定式化したうえで、前者から後者への平板な移行モデルを斥ける。たしかに、近年、社会構築主義の強い影響力のもとで、先験的な実体としてのアイデンティティを主張する立場は徹底的に批判され、エスニシティの構築性は自明のものとされた。このような今日の支配的モデルに対して、本研究は、一つの強力な問いをなげかける。それは、「エスニシティやアイデンティティが社会的に構築されたものであるのならば、なにゆえにこれらは人々の実存を揺るがすような圧倒的にリアルで恒久的な存在として現在するのだろうか」というものだ。

本研究においては、エスニシティに関わる議論を、二つの潮流のパラダイム転換と捉える見方を排して、R. ブルベイカー、F. クーパーなどが主張するように、エスニシティとアイデンティティが内包する規範的・恒久的側面と記述的・流動的性質との相互補完的關係に着目する。ただし、本研究は、これらの相互補完主義者が両者の関係性の具体的全体的メカニズムの解明まで踏み込んでいない点を指摘し、両者の「接合(articulation)」メカニズムを分析の俎上にのせようと試みる。そのための手がかりとしたのが、「物語(narrative)」を共同で紡ぎあげるという集合的实践である。この営みの過程で、アイデンティティの恒久的永続の様相が生成され、苦難の経験の記憶と語りが集合的に継承されることで、本源性を獲得していく。こうした恒久化の過程は、アイデンティティの流動化、構築化とまったく同一のメカニズムで生起する。本研究は、こうした過程を日系ブラジル人の集合的实践を対象に具体的に分析することで、エスニシティとアイデンティティをめぐる二つの潮流の接合モデルをみごとに提

示したのである。

本研究の第二の意義は、方法論的なものだ。日系ブラジル人などのような、かつての移民（あるいはその子孫）が同じ出自をもつ社会へ出稼ぎ的に移住していく移動現象は、移民研究においてはエスニック・マイグレーションとして分類される。この研究分野においては、移民研究のなかでもとくに、送り出し先と送り出し元の二つの社会、さらにいえばそれぞれの社会のなかで移住先が拡散するため複数の社会でのフィールドワークが必要になる。こうしたマルチサイティッドなフィールドワークは多くの困難がともなうために、効果的に実現することはむづかしいとされてきた。日本における日系ブラジル人研究においても、その傾向はあてはまる。しかしながら本研究においては、ブラジル移民の送り出し港があった神戸を基点として、いくつかの家族をとりあげ、彼らが暮らすサンパウロやブラジル各地の日系人コミュニティをフィールドワークすることで、たんなる日本出稼ぎ者の日本滞在中の意識にとどまらず、彼らの数世代にわたる家族メンバーの生活世界（日本への出稼ぎ経験を含む）の精査のなかから彼らのアイデンティティと日本社会への帰属意識の揺らぎをとらえることができた。その意味で、本研究は、エスニック・マイグレーションに関するきわめて貴重なマルチサイティッド・エスノグラフィとして高く評価できる。

第三の意義は、日系ブラジル人研究における貢献である。従来の日系ブラジル人研究においては、日本社会において周縁化された彼らの過酷な労働・生活環境の分析や、ナショナリティとエスニシティのあいだで動揺する帰属意識の考察が支配的であった。しかし本研究においては、ブラジル社会への帰属意識と日本社会への忠誠心というように平板に二分化される見方を乗り越えて、ブラジルで暮らす家族の帰属意識の偏差、非日系人との婚姻による帰属先の多様化、戦前の棄民政策の歴史の学習、日系移民の集会的受難の記憶の身体化、さらにはこうした経験の物語化と集会的語りといった多重の回路が多元的かつ複雑に絡み合いながら、彼らのアイデンティティとエスニシティを生成していく様子がダイナミックに描き出されている。その点は、従来の日系ブラジル人研究を一段階発展させたものと評価できる。

とはいえ本論に問題がないわけではない。アイデンティティ研究の刷新を提起した理論部分と後半の日系人家族の帰属意識の実証的考察部分が若干乖離しており、一部、理論的問いかけに対する説得的な応答とはなっていない点があること、理論部分ではアイデンティティの流動性と恒久性を架橋する試みの検討において、N. ラポール、D. グレーバーなど 2000 年代後半の重要な研究が検討されていないこと、実証部分では、物語を語る日系人の日本における生活世界の記述分析が十分でないこと、などは今後の課題である。しかし、こうした弱点も本論の意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2013 年 1 月 30 日、調査委員 4 名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。